様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４１３５

研究課題名（和文）戦間期静岡三地域における賀川豊彦同労者による協同組合型社会事業実践の比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of KAGAWA's Cooperative-Social Enterprises around Inter-War Period Shizuoka

研究代表者
伊丹　謙太郎（ITAMI, Kentaro）

千葉大学・人文社会科学系教育研究機構・特任助教

研究者番号：３０５１３０９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、賀川の影響下でスタートした御殿場農民福音学校、浜松の聖隷社（現在の聖隷福祉事業団）の沿革と事業運営を比較・検証した。本課題前に実施した、賀川が継続的に直接指導に関わった東京、大阪、神戸の事業の比較研究に対し、今回の対象は、賀川の影響が間接的であることもあり極めてユニークな事業展開を確認することができた。また、岡本利吉が裾野市に創設した農村青年共働学校と賀川の農民福音学校とを比較することで、同時代における両者の協同組合思想を対比した研究を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦間期農村の窮乏化や農民たち自身の手による解決のための諸事業を具体的に描くことができた。多くの賀川像は、神戸や東京の事業と重ねて理解されがちであるが、成果として刊行した諸論文では、賀川は農村課題を極めて重視し、多大なエネルギーを注いでいたことを示している。
岡本利吉など同時代の消費組合の指導者も共通関心として農村青年の育成を重視していたこと、教育と合わせて協同組合という処方箋が窮乏する農村課題への一つの解決策として活用されていたことも明らかにした。彼らの取組を検証するなかで、戦間期における農村への民主主義定着を重視する視座が濃厚に存在していた事実を確認できたことの意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This study focus on the building community with a cooperative way of organizing people in countryside Japan. I picked up examples from Hamamatsu, Gotemba, and Susono area within Shizuoka prefecture. These are related to Toyohiko Kagawa and his social vision, directory and in-directory. Through this comparative study, I distinguish Kagawa's experimentation in farming community with the one in urban area. This would expand to an elaborating a new image of Toyohiko Kagawa. Kagawa and other cooperative organizers share a concept of educating a youth farmer is most important to resolve a variety of community problem in farming village. These kind of experimentation is valuable not just that period but for us all (contemporary society).

研究分野：社会福祉学

キーワード：賀川豊彦　岡本利吉　聖隷社　農民福音学校　農村社会事業　協同組合　消費組合　長谷川保

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、賀川豊彦の社会事業および協同組合運動を論じた既存研究の多くに共通する「賀川豊彦個人のカリスマの下で社会事業が展開する」といった単眼的描写を難じ、各事業に関わった同労者集団間の事業開始時期と地域的偏差に焦点を当て、神戸新川・大阪四貫島・東京本所の都市部 3 箇所での同労者集団の取組の比較分析を進めてきた。この研究を通し、設立時期の先行する神戸新川のセツルメントが昭和に入って以降も「慈善・救貧」の特徴を色濃く残していたのとは対称的に、四貫島および本所の実践が時代の潮流を受けた「防貧」志向の事業運営を軸に推進された点を明らかにした。さらに、後 2 者間でも、「社会教育による人格形成」に力点を置く四貫島と、協同組織による自治・共助的解決策（実践的協同体の形成）を特色とする本所という違いが見える。こうした 3 者比較の視座に立ち、1930 年代に至り賀川豊彦自身の立脚点が、四貫島型の社会事業から本所型社会事業（および協同組合主義の強調）へと大きく変貌する結果に繋がったことを論証した。つまり、賀川思想を象徴する「協同組合を基盤とする社会構想」は、神戸時代における彼自身の視座に内包されながらも、本所同労者集団の実践・事業展開に影響を受けて鮮明になったものと結論づけることができる。ギルド社会主義者として大正期以降の（労働組合・農民組合を含む）「広義の組合主義」を牽引する役割を果たした賀川の社会構想が後期において協同組合色をより濃厚にさせる経緯には、このように、賀川の事業が同労者の実践によって多く支えられるだけではなく、賀川の思想自体にも大きな転換点を与えたことは、新しい賀川像の提示へと繋がったと思われる。

一方で、大都市圏は人材も多く、相対的に実験的な取組が展開しやすかったのに比し、賀川の言う農村社会改造は極めて困難なものであった。こうした着眼点から、本研究では農村社会事業を中心に、賀川の農村における取組と同労者たちの実践に焦点を当てながら、既存の賀川研究に見られる賀川像および賀川思想を批判的に検証している。

２．研究の目的

研究を通して明らかにしようとしたものは、賀川が窮乏化する農村問題の解決策として複合的に提示してきた多様な提言が、実際に寒村地域においてどのように導入・実践されることになったのかということである。神戸新川のスラム地区や関東大震災で罹災し焼け野原となった東京本所は、事例としては極めて例外的なケースとなるのに対し、賀川の取組としてはむしろこれらがモデルとして語られることが多い。

一方で、1930 年代初頭の昭和農村恐慌を端的な例とするように、農村の地域社会こそが日本の社会問題の縮図であり、この全国に散らばる課題をいかにして解決するのかが賀川たちにとって最も主要な課題であったことは改めて確認されなければならない。賀川自身は初期の神戸での活動の時点で、スラムは全国的課題が最終的に噴出する場であり、諸課題の本来の原因はむしろ農村部にあるという認識を強くもっていた。労働運動への参画を経て、組織化することの価値とその方法論に習熟した賀川は、戦前最大の大争議とされる川崎三菱争議での敗北の同年(1921 年)10 月には杉山元治郎と日本農民組合を結成、全国に存在した農民組織のネットワーク化を図り、政治勢力としても無産者政党の一翼を担うまでに発展させた。さらに 1927 年には兵庫県で農民福音学校を開始、これは北海道から沖縄まで最盛期には全国 35 箇所での開校へと漕ぎ着ける。

運動・事業・教育の組織化を通して賀川たちが実現したかったものは何であったのか、また実際には各地域でのこうした取組はいかなる実を結ぶに至ったのか。この点を、三大都市における賀川指揮下での同労者による事業・運動とは違う、地方農村における間接的同労者層の実践として描き、再現することが本研究の主たる目的である。賀川の社会構想を彼の著作からのみ引き出すのではなく、むしろ彼の提言を承けてそれぞれの地域で実験的な取組に従事した同労者集団が最終的に何を産み出したのかという角度から迫っていくことで、より立体的な賀川同労者の社会事業像および賀川像を浮き彫りにすることが本研究の大きな目的である。

３．研究の方法

農村を軸に賀川豊彦同労者の活動に光を当てた先行研究である星野正興『日本の農村社会とキリスト教』(2005)は、飯沼二郎の業績（1988 年刊行の『日本農村伝道史』など）を例外として、当該領域の研究が極めて手薄であることを指摘し、当該領域での研究展開の必要性が強く主張されている。実際に、近年においても、農村社会事業や農村伝道をテーマとする天野マキ(2008)や李善惠(2011)等の近年の研究が存在する一方で、両者を含め、一般には賀川の著した『農村社会事業』(1933)を中心に彼の農村系著作群の読解を主眼とした作品分析に終始するものである。この点で、本研究の特徴は、史資料調査とオーラルヒストリー収集によって各地域の事業実態や同労者ネットワークの解明を行う実証的分析であるという大きな違いがある。

また、農村を対象とする賀川研究に欠けていた実証的分析を補完する上で、本研究が対象とする静岡県域で大きな勢力をもちかつわが国協同組合運動の起原のひとつでもある報徳社運動や、戦間期の農山漁村経済更生運動などの実態を詳細に記述した日本近代史・郷土史研究の膨大な先行蓄積を参照することで、同労者集団の置かれた同時代状況のマクロな把握と彼ら事業モデルの固有性や特質を描き直すことも含め、狭義の賀川研究に限定しない史資料研究の範囲という点でも、既存研究にはなかった取組となる。

賀川研究の多くは宣教史を専門とするキリスト教系の研究者によって刊行されてきたが、こ

の点では経済史を中心に農村社会学など戦前の社会科学系の調査研究との間に大きな溝があったことは否めない。本研究では、各々における先行する研究成果に学ぶ一方で、両者を連結することで見えてくるものを史資料分析・解釈という観点から纏めていくという方法を骨子とする。

対象地域としては、賀川同労者の事業としてすでに同時代において『雲の柱』等賀川ミッションの機関紙において言及されていた、浜松の聖隷社、御殿場の農民福音学校、島田の農場塾という三者を選定している。賀川自身が、この三者を繋ぐことで静岡県内の取組が全国のモデルとなるような大きな運動になることを強く期待していた。この比較においては、三者における同労者の属性の違いなども重要な要素となる。浜松の聖隷社に集った同人たちは、理想のコミューンを創りたいという思いを抱き、県外各所から集まってきた人びとであり、思想的な立脚点も各々異なっていた（この点は研究成果において後述）。他方で、御殿場の同労者たちは地元の農村青年たちであり、賀川を御厨の地に招聘し多くの仲間を地域内に増やしていくことになった。こうした同労者集団の属性の違いもまた、比較研究において支軸のひとつとなっている。

研究代表者が本研究課題への着手以前に実施した東京・大阪・神戸の三都市比較研究は、関東大震災の救援活動を契機に生まれた本所の実践に特に力点を置き、震災救援における住民とボランティアとの「罹災者/支援者」という関係が、いかにして変化し、住民協働型のまちづくりへと転換したのかを描いている。これに対して、今回の研究では、震災後のまちづくりや地域復興という現代的課題に対し、文化・歴史的背景を踏まえた農村地域の多様性・固有性に応え得るものであるよう、自覚的に研究を進めている。主たる研究方法は、史資料分析とインタビューという二者に大きく区分することができるが、上述のように、史資料の対象としてこれまで行われていなかった分野間の連結を意識するなど、独自性のある視点から研究を推進することになった。

４．研究成果

本研究の成果を示す上で、まず当初３年であった研究計画が期間延長により４年となった理由について説明する必要がある。当初計画では、浜松・御殿場・島田の三拠点の比較研究として進めたが、初年度の時点で島田の取組についての史料収集の結果、他の二者との比較に耐えうるほどの規模・期間のものではなく、同地のキリスト教会信徒のかなり私的な取組として間欠的に実施されたものであることが判明した。賀川ミッション機関紙等では具体的実像については触れられていなかったこともあり、史料収集・分析自体は賀川研究において新しい知見を加えることとなったが、比較研究として挙げられるほどの取組ではなかったため、本研究課題の軸となる比較研究の対象から外すことになった。

一方で、御殿場の調査を進めるなかで、賀川の同時代人であり、消費組合のリーダーでもあった岡本利吉が隣町にあたる裾野市において農村青年共働学校を建設している点に興味を覚えた。賀川による御殿場農民福音学校開設（1930）と近い時期（1927）に設立されたこの学校について史資料を収集し、教育カリキュラムなどを分析することで、賀川と岡本が農村問題解決の途として青年教育を軸に置くという点で共通点をもちつつも、社会構想やそのための具体的教育内容などに至るまで大きく相違する点なども確認することができた。

消費組合運動において、賀川による共益社グループは、西日本中心に運動を展開していたのに対し、岡本が主導した消費組合である共働社は、関東の下町を中心とした労働組合員（純労）の組織化によって関東消費組合連盟へと拡大させるに至る。もちろん、20 年代後半から 30 年代初頭は窮乏化する農村の問題に対して多くの知識人・活動家たちが胸を痛めた時代でもあるが、そのなかでも消費組合運動をリードした東西の両雄が富士の裾野において同じような取組を始めていることは極めて興味深いものである。一方で、静岡は幕末から明治以来の報徳社運動が盛んな地であり、様々な運動・事業の思潮が入り混じり、農村における極めて実験的な取組が実施されていたことが分かってきた。こうした点で、２年目より比較研究の対象として、島田地域の代わりに裾野地域を選定し直し、三者の比較を続けることになった。

浜松の聖隷社については、「研究の方法」で触れたように、多様な出身地・思潮を背景にもった青年男女が理想となるコミューンを建設するという決意からスタートしたものであるが、このなかで当初賀川の思想的影響下にあったのは同人のひとり鳥居恵一であった。彼は農民福音学校で学ぶなど、直接賀川の知遇を得、初期事業のひとつである消費組合浜松同胞社を発足させることになる。1939 年まで 10 年に及ぶ期間この消費組合は事業を継続させることになったが、30 年代には結核療養施設である聖隷保養農園が開墾地であった三方原において大きく伸長し（三方原における療養施設は、賀川ミッションであるイエスの友会による一坪献金運動による経済的支援によって建設された）、同人を中心とする相互扶助型の協同組織を主体としたコミューン建設というモデルから、結核患者など居場所を奪われた人たちを支援し患者-支援者コミュニティを建設するというものへと大きく舵が切られた。本事業の特異な点としては、賀川ミッションの中核事業が、まさに同時期において慈善的救貧事業から相互扶助、住民協働へと展開していたのに対し、本浜松モデルは、農民福音学校等で教授された協同組合によるまちづくりというモデルから病者や細民の支援という慈善的福祉・医療モデルへと、逆ベクトルでの変化を遂げているということである。

聖隷社は、社会福祉法人聖隷福祉事業団として 2020 年 6 月現在で、１都８県に 161 施設 352 事業を展開するまでに発展したが、戦後においても、賀川の中核事業の路線とは違った特異な展開を遂げるに至っている。その間には、農村派と病院派という事業路線をめぐる議論なども見ら

れたが、保養農園によって確立された理念が継続されているとみることができる。本研究では、事業展開とともに、事業方針の背後にある思想性などにも分け入ることができた。病院事業を代表する長谷川保の思想と賀川のそれとを対比すると、両者が終戦後の新日本建設という目的に向けた共闘（実際に上京時の長谷川はつねに賀川家に寄宿している状態であり、国会質問などについて事前に賀川に相談をしていた）の一方で、失業保険や生活保護などの社会保障政策における思潮は大きく違っている。長谷川による聖隷社が戦後の医療・福祉分野において聖隷社が先端的取組に着手できたのは、農村派との対立などにも反映されているように、行政機能の拡大とそれに相即したサービスをいち早く準備できたところにある。すなわち、一方で協同組合を中心とする賀川の草の根民主主義（非営利・市民活動）路線が戦後の福祉国家化の中で周縁化されたのに対し、長谷川の事業モデルはまさにこの福祉国家化に極めて最適化された運営であったということが言える。この点は、長谷川の下で長年行動をともにした大内和彦が長谷川の思想を回顧して唯一の難点として「コミュニティ意識が乏しい」と指摘していることなど、多くの傍証が存在する。

「新しい公共」が喧伝され、公共サービスのあり方に変化が求められている今日、市民組織・市民活動を通した住民自身による地域のエンパワーメントが求められるようになってきた。こうした流れは、戦後昭和期には見落とされていた市民自身の自発的な活動、特に賀川の提唱した協同組合による社会再建という構想が装いを新たに復活してきていることの証左でもあり、また今後の社会を考える上でも、戦前における多様な実験的市民事業がどのような経過をたどったのかを跡づけることは重要な仕事となる。本研究課題の４年間は、一方で、戦間期の賀川同労者の事業を再現し、その多様性を描くという成果とともに、私たちの時代においても、歴史的視座から社会の変化の方向性やあるべき社会の構想に大きな資源となる成果となったと自負している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計26件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 伊丹謙太郎	４．巻 42
２．論文標題 書評：白井堯子『明治期女子高等教育における日英の交流- 津田梅子・成瀬仁蔵・ヒューズ・フィリップスをめぐって』ドメス出版，2018年	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ロバアト・オウエン協会年報	６．最初と最後の頁 184，189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊丹謙太郎	４．巻 66
２．論文標題 記録と解釈―知恵泉『人の役に立つには 社会事業家 賀川豊彦』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 賀川豊彦研究	６．最初と最後の頁 77，84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊丹謙太郎，廣田智子，竹端寛	４．巻 38
２．論文標題 共生社会構築のための基盤としてのCaring with(1) 連帯を創出する	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文公共学論集	６．最初と最後の頁 72，91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊丹謙太郎	４．巻 667
２．論文標題 協同の精神を次世代につなぐー千葉大学協同組合論寄附講座、推進の５年間	５．発行年 2019年
３．雑誌名 協同組合研究誌にじ	６．最初と最後の頁 88，95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 38-2
2．論文標題 書評：杉本貴志編『格差社会への対抗-新・協同組合論』日本経済評論社，2017年	5．発行年 2018年
3．雑誌名 協同組合研究	6．最初と最後の頁 78，82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 60-10
2．論文標題 戦後の活躍と協同組合間連携 ： 平和とよりよき生活の実現へ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 10，13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 513
2．論文標題 協同組合運動を軸とした賀川豊彦の思想と実践 ： 素描	5．発行年 2018年
3．雑誌名 生活協同組合研究	6．最初と最後の頁 21，28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 310
2．論文標題 協同労働を学び実践する場を創る ： 千葉大労協講座の初年度と目指すもの（特集 「ワーカーズコープ論」寄附講座運動(2)学生と社会をつなぐ戦略を焦点に）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 所報協同の発見	6．最初と最後の頁 39，52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 60-9
2．論文標題 協同組合は社会を進化させる運動である ： 医療・共済における賀川豊彦	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 18，21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 60-8
2．論文標題 災害救援/ボランティアの父・賀川豊彦 ： 公共哲学とコミュニティの視点	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 16，19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 60-7
2．論文標題 次世代の仲間を育むリーダーシップ ： 協同組合における教育とはなにか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 18，21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 60-6
2．論文標題 人間的な経済を求めて ： 多様な人びとの連帯と労働運動	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 24，27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 60-5
2．論文標題 青年賀川豊彦とスラムでの生活 ：「寄り添い」と「共感」の行方	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 16，19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 60-4
2．論文標題 2030年への賀川の遺言 ： SDGsと協同組合の課題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 10，13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 306
2．論文標題 多様な声が行き交う「居場所づくり」の可能性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 所報協同の発見	6．最初と最後の頁 120，121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 25
2．論文標題 現代日本の協同組合の社会・経済的インパクトと賀川思想の継承ー市民セクターの主要な担い手としての協同組織の経済実態について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 賀川豊彦学会論叢	6．最初と最後の頁 38，61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 42
2．論文標題 賀川豊彦と岡本利吉素描ー二つの生協運動と社会構想ー	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ロバアト・オウエン協会年報	6．最初と最後の頁 97，110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 66
2．論文標題 書評ー鳥飼慶陽『賀川豊彦と明治学院 関西学院 同志社』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 賀川豊彦研究	6．最初と最後の頁 60，66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 38-2
2．論文標題 書評ー田中秀樹編『協同の再発見ー「小さな協同」の発展と協同組合の未来』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 協同組合研究	6．最初と最後の頁 84，87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎（執筆・取材協力）	4．巻 713
2．論文標題 賀川豊彦記念館・資料館の紹介	5．発行年 2017年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 16，23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 718
2．論文標題 2030年への賀川の遺言ーSDGsと協同組合の課題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 10，13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎（監修）	4．巻 94-5
2．論文標題 JA共済誕生秘話ー今も受け継がれる賀川豊彦のめざした愛と協同の社会	5．発行年 2018年
3．雑誌名 家の光（別冊付録）	6．最初と最後の頁 3，13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 657
2．論文標題 賀川豊彦における平和思想の変遷と協同組合平和論	5．発行年 2016年
3．雑誌名 協同組合研究誌にじ	6．最初と最後の頁 25,33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 704
2．論文標題 現代に生きる賀川豊彦の哲学とその足跡(上)	5．発行年 2017年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 10,15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 705
2．論文標題 現代に生きる賀川豊彦の哲学とその足跡(下)	5．発行年 2017年
3．雑誌名 共済と保険	6．最初と最後の頁 16,21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊丹謙太郎	4．巻 65
2．論文標題 昭和偉人伝・賀川豊彦－記録と解釈	5．発行年 2017年
3．雑誌名 賀川豊彦研究	6．最初と最後の頁 51,57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　11件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 伊丹謙太郎
2．発表標題 友愛の思想から見る協同組合連携の可能性と展望
3．学会等名 日本協同組合学会第38回秋季大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 伊丹謙太郎
2．発表標題 SDGsの15年と協同組合の果たすべき役割
3．学会等名 全国大学生協連東京ブロック大会記念講演
4．発表年 2018年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 消費組合運動から農村塾へ-賀川豊彦と岡本利吉の農村青年教育-
３．学会等名 社会事業史学会第45回大会（5.13，長野大学）
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 子ども食堂とフードバンクーコメント
３．学会等名 フードバンクちば５周年記念シンポジウム（6.10，千葉大学）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 農村をめぐる先駆者たちの闘いー賀川豊彦と岡本利吉
３．学会等名 日本協同組合学会第37回秋季大会分科会テーマセッション（9.23，徳島大学）
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 日本における協同組合ー運動の現状と課題
３．学会等名 大学生協総武エリア代表者会議記念講演会（10.14，大学生協杉並会館）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 賀川豊彦と岡本利吉の社会実践にみる協同精神についての一考察
３．学会等名 ロバアト・オウエン協会第163回研究集会（10.21，主婦会館プラザF）
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 協同組合・共済事業の原点を考える-賀川豊彦の思いと活動から-
３．学会等名 日本共済協会セミナー（11.22，ＪＡ共済ビル カンファレンスホール）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 社会連帯事業プレゼンテーションーコメント
３．学会等名 社会連帯機構東関東地方委員会総会（11.23，労協センター事業団東関東事業本部1F会議室）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 協同組合という働き方、これからの協同組合について
３．学会等名 インターンシップin協同組合2017記念シンポジウム（12.16，明治大学）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 命と社会に向き合う協同労働・よい仕事の深化、発展へ
３．学会等名 よい仕事研究交流集会2018in東関東パネルディスカッション（1.28，千葉市美浜文化ホール）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 運動の原点から考えるー賀川豊彦と協同組合
３．学会等名 生活クラブ神奈川職員リーダー研修会（2.16，新横浜オルタナティブ生活館）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 よい仕事実践レポート第15分科会ーコメント
３．学会等名 全国よい仕事研究交流集会2018（3.4，TKP品川カンファレンスセンター）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 賀川豊彦から持続可能な開発目標（SDGs）へ
３．学会等名 2018年度青森県協同組合４団体合同研修会（3.12，アップルパレス青森）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 学校教育における協同組合教育の導入について
３．学会等名 IYC記念全国協議会教育構想委員会（3.8，飯田橋JC総研ビル）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 日本の協同組合の市場インパクトと賀川豊彦の精神
３．学会等名 賀川豊彦関連団体連絡協議会定例会議（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 現代日本の協同組合の経済動向と賀川豊彦の精神
３．学会等名 賀川豊彦学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 伊丹謙太郎
２．発表標題 終戦期日本における統一組合法構想とその蹉跌
３．学会等名 日本協同組合学会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 伊丹謙太郎	４．発行年 2016年
２．出版社 全労済協会	５．総ページ数 31
３．書名 関東大震災復興における賀川豊彦とその同労者の取り組みに見る地域形成の視座の検討	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考